＜連載 18＞

今を生きる、永遠のいのち(生命)

～すべての生き物が、一つだけ持っている同じいのち～

理事長　高見　優

私事ですが、父亡きあと独居の母を呼び寄せ、約十年ほどいくつかの介護事業所を経て「ささえ愛おうみ」に登録し看取りまでお願いしていたところ、先日老衰のため静かに旅立ちました（99 歳 11 月余）。

事業所職員ほか多くの関係者の皆さんに心から感謝申し上げます。体調の変化や入退院もありましたが、24 時間休みなく丁寧な介護サービスをしてもらい、すっかり頼り切っていました。面会に行くと、家族が遠方におられる利用者から母が羨ましがられ、申し訳ない気持ちから訪問を控えたこともありましたが、職員はどの利用者に対しても分け隔てなく暖かく接しており、気遣いすることなく安心してお任せしました。

最期の数日は、コロナ禍にもかかわらず、事業所管理者から連日訪問を提案していただき、すでに明瞭な意思疎通は不可能でしたが、私たちの顔をみたときの表情の変化から、認識しているらしいことは分かりました。

母は敬虔な仏教徒（浄土真宗）で若いころ献体の意思を文書に残し「白菊会」に登録していましたので、即日大学病院に搬送してもらいました（医学生の実習に供されたのち、２～3 年後に遺骨が戻される由）ありがとうございました。

いのちの不思議

私たちは等しく自分のいのちを持っており、そのいのちは父母から受け継いだものです。その先をずっと辿っていくと、38 億年ほど前の最初のいのちに行き着くようで、途中で無数の枝分かれがありそれら全体を「生命樹」「生命誌」に図示されているのを見たことがあります。自然生態系の一員として、酸素や水のほか動植物やミネラルなどの物質を吸収・排出を繰り返し、すべてのいのち・モノとやりとりをしています。そして私自身の身体の細胞組織は日々新陳代謝を繰り返し、数日～数ヶ月でほとんどが入れ替わるそうです。それでも私という存在は、年を重ね、姿形を変形させつつも辛うじて自我を保っているつもりですが、他者から見て、「変節した」「人格や人相が変わった」などと思われているやもしれません。

私の記憶の中には、亡くなった家族が確実に住んでいます。それだけでなく生まれたとたん誰に教わったわけでもないのに、すぐに呼吸をしはじめ、その後ハイハイし、立ち上がり、歩き始めたそうです。わが家の飼い犬（ピッピ・15 歳）を観察すると、異物を食べて苦しくなると、道端の草を必死になって食べ続けて、胃の中から異物を雑草の塊と一緒に見事に吐き出す知恵を発揮！　誰かに教えられたわけでなく、生まれながらの知恵（生命知・本能知）を持っているのです。

私たちも、睡眠中意識レベルが低下していても、呼吸や心臓その他の生命活動の基本は休むことなく働いている（心臓を自分の意志で止められる人はいませんよね）。

これらのことからわかることは、私のいのちと思っているが、もっと大きい自然の叡智、生命知という本当のいのちがあり、私のいのちも皆さんのいのちも同じ一つのいのちなのではないか。

確かに一人ひとり、動植物の各種のいのちは別々のいのちでありながら、同じひとつながりのいのちとして存在しているのではないか、だから、いのち以外の物からいのちを創り出すことは絶対に成功しないのではないか・・・

本年４月、組合員であり新潟大学名誉教授の沢登佳人先生が逝去されました。当生協の介護事業所を長く利用されておられ、私は 40 年ほど前に偶然運命的に出会い、以来先生の思想・哲学に瞠目させられて「学会」を主宰しています。

近年、先生の思想に注目する方が増えており、「本能知と理知」（白順社）、「生命とは何ぞや」（現代人文社）、「自己超出する生命～生命の尊厳と人間の責任」（同）などのほか、多数の著書があります。（興味のある方はご連絡ください。）

前記の「いのちの不思議」について書いた内容は、沢登先生の死生観・生命論の考えに関連します。

同じいのちを持っているとしたら、どうして動植物を食べるのか、なぜ人類社会は戦争・対立が絶えないのか、等々の疑問が噴出してきますね。それらの疑問にどう応えるか、そしてどうしたら支え合い・協同の社会を実現できるのか？　それらの答えを見つけたいからこそ、私（たち）は今まさにこの事業・活動を実践しつつ、仲間とともに人類の「無形文化遺産」である協同組合の理論と実践を継承し、発展させていきたいと考えているのです。

一人は万人のため、万人は一人のため。　　（ご感想・ご意見をお寄せください：編集部）